
りんごおばけ

ウラレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
りんごおばけ

【Nコード】
N8787Q

【作者名】
ウラレ

【あらすじ】
ひどくけだるい朝に起こった恐ろしい話。

まあ、いとお空に飛んでいる、黄緑ピンクの子猫が大嫌いだった。埃っぽい部屋の中でりんごおばけが笑っている。

やけににやけた笑いがとてもいらつく。

窓から空が見えない、倦怠感。

「いよいよ、いよいよ」

りんごおばけが笑っている。

「いよいよいよいよ」

笑いながら私の周りを飛び回る。

フライバイ飛行のようになると。

グルグルグルグルグルグルぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるあ、うるわい。

まるで蚊に弄ばれているような感じ。

首筋に小さい虫が群れているのが見えている。

ざわざわかゆいかゆいざわかゆいかゆいざわざわかゆいわざかゆい
わかさかゆいざゆいぐるぐるウルうる

ニ。ナカニ、

しかしこの部屋はとても埃っぽすぎる。窓を開けよう。

私が立ち上がると椅子は空回りした。

部屋の間取りが暗すぎて解らない。窓から僅かに差し込む光は穏やかすぎた。

窓に近づく。窓に手をかける。強く力を入れる。開かない。開かない。開かない。

鍵が掛かってるんだろ？ でもそれならこちら側に何かしらの仕掛けがある筈だけど……

もしかして、これは窓じゃなくてガラスが嵌められてるだけなのか？

何かしらのフェイク？

ここまで考えて私はあることに気がついた。

ここが何処なのか、私は、知らない。（激しくなる心拍数）

それどころか目が覚める前までの記憶がぼんやりとしか思い出せない。（さらに激しくなる心拍数）

さらにさらに激しくなる心拍数。

窓が開かない。私の周りを飛び回る奇怪な生物（？）。私の首筋に居座る小さな虫の群れ。

びゅんびゅんびゅんびゅんうざい。

空が黄緑ピンク。りんごおぼけはさらに速く私の周りを回る。

ひゅんひゅんひゅんひゅんびゅんびゅんびゅんびゅんびゅん。時速

300km/hで。

殺傷力まであるんじゃないかと思った。風が痛い。風が痛い。

首筋から小さな虫が吹き飛ばされていく。

いや……これは虫じゃない。何か穏やかな……天使みたいなもの。すでに奇怪な音しか出さなくなったりりんごおぼけ。速すぎて逆に止まってみえた。

びびびびびびびびびび。

気を失う前に見えたのは首筋から血が流れるシーン。

ざあざあざあざあ。

「……雨？」

窓の外では、雨が降っている。

それはさっきまで私の周りを取り巻いていた不快な音ではなく、穏やかで優しい音だった。

ふと上を見ると、電球がついている。が、消えかけていた。

ちかちかと点いたり消えたりしている。

さっきまでのおぞましい体験とは大違いだ、と思った。

そう言えば、りんごおぼけが居ない。

後ろを振り返ると、ドアが少しだけ開いている。

ここをもつと知るために、探検でもしてみようか。
椅子を立つとまた空回りするだろうか。

ふと見た私の膝から下がない。

横の机の上に包丁。

鏡に映る自分の姿は醜い老婆。

「何よ、これ」

急に雨が強くなった。

ざあざあだだだだだだだ。屋根を打つ轟音。

雨漏りが出来る。どんどん増えていく。ぽつぽつ。ぽつぽつぽつぽつぽつたたたたたたた

やがて、屋根など無いようにこの部屋は土砂降りになった。

鏡の中には少女。

この部屋はどこかおかしい。私がおかしいのかもしれないけど。

すっかり雨に濡れた古い服。そういえば、こんな服さつき着ていただろうか？

この雨もどこかおかしい。黒い雨なんて見たことも無い。

このままだと、赤い血みたいな雨だつて降ってもおかしくないな。部屋の中はたちまち黒インクをぶちまけたようになった。

床に伝わる雨が重なって、この部屋はとうとう大洪水になってしまった。

首筋まで埋め尽くす雨。

これはいよいよおかしい。これはいよいよおかしいぞ？

考える。何故こんなことになったんだろうか？

大体、りんごおぼけが何故こんなところに……

水に連れて行かれるように体が浮上していく。

そろそろ天井に近づくぞ、と思った瞬間。

小さい頃、私の住んでいたところでは雨がとても降っていた。
母はそのせいで腐ってしまった林檎に目を描いて、口を描いて、

小さい私に見せびらかした。

それを私は「りんごおばけ」と呼んでいた。

小さい頃の私はただの母のお遊びだったりんごおばけに怯えていて、りんごおばけを引き合いに出せばすぐに言うことを聞いたという。

そう、母から聞いていた。

母は私が10歳になる前に病気で死んでしまった。

不可思議なのは死んでしまう確立の低い病気で死に、また死ぬ前日までとても元気だったという事実。

父はそれを「母さんらしいな」という一言で済ませてしまったが、実際に警察で医療ミスや自殺の可能性を調べたらしい。

だがその証拠は見つけられず、結局病気の合併症での死亡、という事になったという。

私はそうは思わなかったが。

母の死に私は違和感を感じていた。確信は持てなかったが、後で父に聞けば、母は体の病気のほかに精神の病気も患っていたらしい。結局、病名が何かは教えてくれなかったが。

しかし、これが夢だとしても何故りんごおばけが……？

机の上に腐食した林檎が置いてある。

その林檎がさらに腐食し、目が開き、りんごおばけになっていくのがまじまじと見えた。

いよいよ私は恐怖を感じた。ここに居ればもう何が起きてもおかしくない。

この部屋にずっと居れば気まで狂ってしまいそうだ。

椅子から立ち上がる。そう言えば、さっきより更に埃っぽくなっている気がする。

りんごおばけが行く手を塞ぐ。

気づけば窓の外は晴れていた。りんごおばけの影が一直線に伸び

ていく。

「ここにいてよ、ここにいてよ」

哀しそうに、楽しそうにりんごおばけが言う。

「ここにいてよ、ここにいてよ」

哀しそうに。

足取りがふらつく。心拍数が更に上がっていく。めまいがする。りんごおばけの声が、まるで頭の中を駆け巡るように、ぐるぐるぐるぐる。ぐるぐるぐるぐる。

周る。駆け巡る声。誰かに似ている、まるで粘りつくような、後を引く声。

飲み込まれてはいけない！

自己暗示のように叫ぶ。

飲み込まれてはいけない！ 飲み込まれてはいけない！

「飲み込まれたら？」

「楽しいよ、ずっと遊べるよ」

恐ろしく、おぞましく、でもどこか懐かしい声がする。

最初から解ってた、この部屋には懐かしいものが沢山ある。

全て、全てが、私の、子供の頃の部屋に似ている。

全てが私の子供の頃の部屋に似ている！

頭の中を駆け巡る声。どこまでも子供のような声。裏の読めない声。引きずり込まれるような声。

引きずり込まれる声。

「ねえ、遊ぼうよ」

寒気が体を襲う。そう言えば全部記憶がある。見覚えがある。全部気にかかっていた。

「おままことは嫌いでしょ？ 虫を潰して遊ぼうよ」

部屋を出るのが後ろめたくなる声。

頭の中の箆笥を全て引きずり出す。そう言えば私の子供の頃は……
「猫のぬいぐるみは嫌いでしょ？ おばあちゃんが嫌いだった？」

「私のお母さんも口煩くって」

「幽霊ごっこをしましょうよ、布団にくるまって」

私の子供の頃の声に似ていて、お母さんの声にも似ている声。
足が動かない。

冷たい汗が伝う。

声が出ない。

口が開くだけ。

「ねえ……ちよつとからかってただけなの。行かないでよ」

「ここにいてよ」

「ここにいてよ」

「ここにいてよ」

やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめろやめろやめ
ろやめろうああああああああ

「冷たくあしらわないでよ」

「ずっと遊んでいようよ」

「この部屋に居るのは楽しいよ」

頭の中がめたくたになる。

頭の中の全ての記憶が巡る。

「この、部屋に、ずっと、」

涙が頬に触れる。

ああ、この部屋は少し寒いな
遊びつかれたら何をしよう

今日の晩御飯は何かなあ

お母さんは元気かなあ

雨が止んだらどこに行こうかなあ

あの子は元気かなあ

明日が待ち遠しいなあ

「でしよう?」

「なら、」

「遊びましょっ?」

小さくなる鼓動の中で雨の音がやけに激しい。

（後書き）

「人間関係に疲れていた……と？」

「はい、そうです……」

「ちら、と刑事は死体を見た。

「でも、死に顔が穏やかなのが気にかかりますね」

父親は床に目を伏せる。

「明日はあの子の誕生日だったんですが……」

「結婚も決まっていたそうで？」

父親は小さく頷いた。

「どうも、自殺の動機が解りませんね……」

父親は涙を拭った。

刑事はここはもう収穫は無いな、と考えて父親の方を向いた。

「では、そろそろ。本日はありがとうございました、まだ辛いでしょうに」

「他殺の方でも捜査したいと思います。それでは、失礼します」

刑事は家を出ると、車に乗って去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8787q/>

りんごおばけ

2011年2月13日13時55分発行